

平成 28 年度第 1 回倉吉市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 平成 28 年 5 月 25 日 (水) 午前 10 時 20 分
- 2 場 所 市民応接室
- 3 出席者 石田市長
福井教育長
藤田委員 宮近委員
仲田委員 福井委員

会 議 の 経 過

- 1 開 会 午前 10 時 20 分
- 2 市長あいさつ
- 3 教育長あいさつ
- 4 協議事項

(1) 倉吉市教育に関する施策の大綱について

市 長 それではまず、大綱について事務局から説明をお願いします。

教育総務課長 (資料に沿って説明)

市 長 この大綱は基本的に振興計画の柱を抜き出した形になっています。基本的に私も異論はないです。ベースはこれによろしいと思います。折角なのでみなさんの思いを語っていただければと思います。

教育長 この間、全国都市教育長会議があり、その中で文科省からお見えになった方の話では、貧困の格差が激しくなっており、この解消に向けての取り組みが必要であると話をされていました。この問題は、教育委員会だけではなく、市長部局とタイアップしながら何ができるか考えていかなければならないとのことでした。

市 長 私も気になっています。貧困の連鎖、その一つの背景に教育の格差があり、貧困に伴い十分な教育や生活上の知識、知恵というものが十分に学べていない子どもたちが増えているという懸念を持っています。食事の提供など福祉的な取り組みは進められているが、学習の場も、倉吉市では倉吉東福祉会で特に母子家庭を中心に学習補助の場は設けられています。このあたりは、全国的な課

題でもあります。そういう問題意識は持っていないといけないと思っ
ていま
すし、私が気になっていることです。

もう一つ私が気になっていることを話しますと、発達障がい児の対応です。
古典的な障がい施策、特別支援教育、そういう言い方がよいのかわかりませ
んが、知的障がいや身体障がい、また病弱な方々へ対する教育保障という面
では、特別支援学級や養護学校などかなり制度化されてきたと思っ
ていま
すが、
発達障がいについては、概念そのものが新しくその範囲は難しい。広く考
え
ると知的障がいも発達障がいに入ってしまうと思っ
ていま
すが、広汎性発達障がいと
か自閉症と言われる子どもたちのケア、教育をどうしていくのかが重要なこ
と
だと考えています。

国の制度も追いついてないで、教育と合わせ整備が必要になると思っ
ていま
す。また、指導力が十分ではない先生だと学級が荒れる原因となったり、落
ち
着いた学習ができないということにつながっていくのだと思っ
ていま
す。この
あたりの教育体制をどうするのかも考えていく必要があると思っ
ていま
す。

教育長

就学援助を受けている割合が平成7年は16人に1人であったのが、平成25
年には6人に1人となっています。倉吉市の場合は、就学援助率は12～13%あ
り、倉吉市においても上がっており全国の6人に1人ということもうなずけま
す。

市長

児童扶養手当や生活保護など、福祉的な措置との整合性をとっていかなけれ
ば
ならないと思っ
ていま
す。ワーキングプアと呼ばれる、働いているけれど生活が
苦しいというご家庭も多々あるため、合わせて考えていかなければなら
ない
と思っ
ていま
す。

委員

おそらく、市町村で解決できる問題でもないでしょう。平均所得の半分以下
という貧困層と呼ばれる家庭も相当な数です。ある新聞では、6年生の学力と
親の所得とは正比例するとありました。この問題はかなり進行していて、簡単
に修正できるという状況ではないと思っ
ていま
す。

なんとかしないと子どもは勉強しないまま、大人になり低所得層で貧困が固
定化してしま
う。優秀な頭脳が人口減少の中で更に減ってしまうことはもった
いないと思っ
ていま
す。日本にとっても大変な問題です。

委員

落ち着いて勉強するためには、まず生活習慣が身につけていることが必要で、
その生活習慣をきちんと教えるべき親が働くことに必死で、たとえば夜働かな
ければなら
ない母子家庭では、朝、お母さんが起きていない状況でご飯も食べ
ずに出てくるとかあるようです。歯を磨くことも知らない子もいるよう
です。
普通であれば、起きたら顔を洗って歯を磨いてご飯を食べてといった生活習慣
を教
えるべき親が忙しくて教えられない。きちんとした生活習慣があつてそれ
が学
習の習慣につながります。

制度的に金銭援助は必要なことですが、生活習慣とか学習する習慣を子ども
たちが身につけられるよう、家庭だけに任せるのではなくて社会として何かで

きることはないかと思います。

たとえば、夏休みなど合宿ではないですが、みんなといっしょに泊まり、朝の習慣などをいっしょにすることができる機会があればと思います。学力をつけるには、まずは生活習慣をつけさせる、このことを学校がするというのではなく、地域の力を借りて身につけさせるのがよいと思います。学習などは、中学生、高校生などが教えるという場面がありますが、学習に追いついていけない子を手助けする場を作ることができないだろうかと思っています。それは、施設を使うというのではなく、地域の中で困っている者を助けるとうことができないかと思っています。

市長 これは、大綱の1番目に挙げている幼児教育、そして7番目の家庭教育にあたる部分で、やはり、このあたりが大事なのでしょうか。

委員 保護者自身がそういう習慣を身につけて親になっていないから子どもにそのようなことを教えることができないんでしょうね。

市長 そういう意味では、保育所や子ども園の役割が大きくなっているのでしょうか。

委員 早い人は生後3カ月から預ける人もいるようですが、保育園に勤めている方が言われるには、たとえば箸の持ち方などを子どもに教えてやってくださいと言われるとのことです。そういった生活習慣に関わることについて、保育園の先生が保護者から言われるという時代ですから、その意味で保育園や幼稚園のやるべきことがどんどん増えている気がします。家庭で最低限してほしいことを伝えても、それすらできない家庭もあるようです。

市長 今の話は、小学校でも同じような状況があるのではないのでしょうか。

委員 就学前のしつけと学力、年収は大きく関わりがありますが、そのことを親がきちんと受け止めていないのではないのでしょうか。日経新聞によると就学前の教育と生涯賃金とは極めて密接な関係があると言われていています。

市長 親の教育が必要なのでしょうか。

委員 小さい時のしつけがいかに大切かというメッセージを送らないといけないが、それを受け止めてもらえるかということもあります。

市長 親の教育が必要だとは、この大綱には書いてはないですが。

教育長 直接は書いてないですが、7番目の家庭教育の充実の中で、「家庭教育の重要性を保護者が自覚し」としてしますので、そのあたりを網羅しています。

昨年、小・中学校 PTA 連合会と教育委員会の3者による講演会を開いた際、短大の横浜園長先生に広い視野から教育のあり方について講演をしていただきました。こうした試みはよかったと思っています。それまでの研修は、場当たりのようになっていましたが PTA 組織自体から研修をきちんとしなければいけないのではないかという思いが出てきて、例えば1年生の時にはこれ、中学3年の時にはこれというように、柱立てをする必要があるのではないかなど、問題意

識を持って話しをすすめています。

市長 PTAの方も小学校に入ってからだと遅いという話もあるかもしれないけれど、その下の子どももあるのであきらめずにやっていくしかないと思います。

委員 学校教育では、基本的には小学校から上の子を対象としていますが、図書館ではブックスタートという事業があります。この対象年齢をお持ちの親御さんにこうした機会を通じて学んでいただくこともいいことだと思います。小学校では授業参観が終われば帰ってしまわれる方もあると思います。ブックスタートのように低年齢の時期に親として子育て、しつけを学ぶ機会をあえて作らなければいけないと、今、話を聞きながら思いました。親になる前にとっても実感がないでしょうから、実際に子どもが生まれ、まだそれほど時間がたっていない時期に、父親も母親そろってできればいいと思います。

市長 今の話は教育というより、対象年齢からすると福祉的な部分だと思いますね。
総合政策課 総合計画を改訂しましたが、28年の4月から新しい計画がスタートしています。その中で今、議論されている福祉の子育てにおける取り組みとして親としての基本的事項の習得のための支援だとか、子どもの貧困が社会問題化する中で、法律ができましたのでこれに基づいた対応をしていかなければいけないと計画には掲載をしています。

市長 所得面では福祉的な面もあり、給付型の奨学金の話が出ていますが、それは財政的な面が簡単にクリアできない。

委員 給付型になると、学力に応じることになり、なかなか難しい。大学に行くとかになるとある程度の学力はいると思いますが、その前の段階、たとえば高校進学の時点でドロップアウトしている子がいたりで、基礎学力をどうつけてやるのが重要だと思います。頑張ろうという気持ちのある子はそこからやっていけるのですが、そうではなく頑張ろうという気持ちになる以前で投げ出してしまう子が一番問題だと思います。そういった子は勉強する習慣もないですし、そういった子をどう救ってやれるのかなと思います。

市長 自治体によっては、塾の費用を補助するというのもある。その可否はいろいろありますが、学力という面では直接的な投資という面で一つの方法だと思います。

教育長 学習の手助けをするという意味では、夏休みに子どもたちの宿題を終わらせようという試みで、地元の高校生が小学生を教えるということを地区公民館を中心に行っている地区も数カ所あります。

市長 同和教育の中で、かなりやってきていますね。

教育長 今もだいたい週一で学習会をしています。もちろん年により異なりますが、やはり効果があったと私は思っています。倉吉市の場合は、同和地区に限らず、たとえば児童養護施設でもやっています。

委員 この前の日曜日、下古川で「下古川サロン」を行いました。これは、地域のお年寄りから子どもまで、いろいろな人が集まって、その中では将棋をおじい

ちゃんに教えてもらってもよいし、こちらではオセロをしたり、また編み物をしたりなど、交流の場を作ってみようと企画をされたものです。

そういう形で地域のいろいろな技術を持っておられる方から教えてもらう中で、小さな子どもが人付き合いとかあいさつの仕方などを自然に身につけられる場となればと思います。その延長線にお勉強があればいいのかなと、今、そんな風に思いました。

一つの家庭だけではできないことを、地域でどうやっていくか、その場をどう作るかなので、財源はなくても公民館でやれば、来られる人が寄り合えば少しずつでもやっていくことができるのかなと思います。

まだ、第1回目なので人がなかなか出てこられなくて参加は少なかったのですが、親が出てこられなくても子ども会で行こうと話して、老人クラブと子ども会とかでいっしょに何かするものができてくればと思いますし、それが地域で育てていくことに少しずつもつながってくればと思います。

教育長

キーワードは地域で次の世代をどうやって育てていくかということですね。土曜授業でも学校へ地域の方が入って指導を下さっています。

委員

公民館活動ということで言えば、地区公民館まで行くことができない方が結構いらっしゃるの、自治公民館活動で今のような形をつくることができないとなかなか出してもらえないですね。年配の方は動けないので、地区公民館まで行くことができないですから、自治公民館を活用していかないとという風に思います。

委員

自治公民館にはそういった文化がないので、たとえば自治公民館単位で「子どもの育成部」のようなものを作って、ある程度定期的に会を開いていくなどしていかないとなかなか難しいだろうと思います。まずは、そういう文化を作っていないといけないとは思いますが、地域の者がやってみようと思わないといけないですね。

体育部でもありますように、仕方なくても人を集めてやっています。こんな風に最初はそんな形であっても、そうしていくうちに文化ができれば、考えが根付いてくるかもしれませんが、どこから、どう説得し動かしていくか難しいですね。

市長

子どもが減って、子どもとお年寄りの密度が少し疎になっているため、人間関係が作りにくい状況ですね。

教育長

ボランティアの関係で、鳥取県のデータを見てみますと、鳥取県は全国で4番目です。

市長

落ちたね、前は全国1位だったけれども。

教育長

そうですね。確かに全国順位ではそうです。この中で、学校支援ボランティアという制度では、県内で約7,000人の方が登録をされており、その内、倉吉市は1,600人います。

市長

多いね。

教育長　　これは、この制度の立ち上げの時に、当時、この制度の担当部署の社会教育係長であった人と私との思いが合致しまして、最初から倉吉は多かったです。この点だけみても倉吉も捨てたもんじゃないと思いますし、これは大きなことだと思います。

小中学校の方も、来てもらって手伝ってもらうのはいいけれど、何を返すことができるのかを考えようと言っています。地区公民館の運動会の役員を結構中学生がするようになりました。この前の上井公民館の運動会では50人くらい出ていました。

市 長　　明倫はどうでしたか。

委 員　　明倫は15人くらいでした。部活があるので途中で帰る子も中にはいましたけれども。

委 員　　保護者から中学校へ今度運動会があるのでそちらへ出られるようお願いに行きますと、学校の方から対象の地区の子たちに「こういうボランティアがあるから行っておいで」と言っていたけりようになりました。以前は、部活最優先という感じでしたが学校側も手伝って下さるようになり出やすくなりました。自分だけ部活を休んで行けないという状況だったのが、部活を休んで行ってこいと言って下さるようになりました。

最初はただのお手伝いでボーと立っているだけだったのが、去年は1つの競技を中学生に任せていました。自分たちで考えるものですから、一生懸命にやるんですね。ちょっとのお手伝いから、運営から関わってお手伝いをするという形に進化してきているので、ちょっとずつでも地域に子どもたちを出させることをしていくと関わりも深くなっていくと思います。

市 長　　学校側からアプローチしていく努力をするということですね。地域とそういう形でどんどん積極的に関わってくる子どもが増えるといいですね。

もう一つ、前からの課題ですが不登校対策です。これは息長くやっていくしかないですが、最近の傾向はどうですか。

教育長　　今年卒業した3年生が、小学校の時点から突出して高かったため、それがすごく影響しましたが、それが済めば無くなるというのではなく、新たに出現するということがあります。

セカンドスクールという話もありましたが、松島所長の話では、子どもたちが自分で食事をつくるとかの経験が必要なのだとおっしゃっていました。体験をさせることがとにかく大切なのだ。

センターに通える子はなんとか次につなげることができますが、センターに通ってこない子、こもっている子、ここにどう手を入れるかということだと思います。

今年は文科省がいうフリースクール、アウトリーチ型に手を挙げまして2人配置しますので、なんとか突破口が開けないかなと思っています。

委 員　　そこは、生活習慣という意味で親の教育とリンクするかもしれませんね。

教育長 自分を認めてもらう、認めてもらえる、自分の力を発揮する、そんな場があれば、なんとか学校の中で過ごしていけるのでしょうかけれども。

委員 子どもも苦しんでいる時に少し一休みして自分を見つめ直す時間があるということが、子どもが立ち直るには必要だと思います。自分の子がそうだったのですが、それだけの時間が必要でした。それをさせてもらえる余裕がないというのがあって、大勢いる学校では、とりあえず紛れていればなんとか過ごしながらまた入っていける状況がありますが、少人数で人間関係がぶつかったままですとといかなければいけないという中で苦しむ子もいたり、集団に入っていくにくい子がちょっと間をおける場がないというのが、小さい単位でのクラス、学校にはあるのかなと思います。

また、これは家庭の貧困につながるかどうかかわからないですが、きちんと出てこられない子の中には、夜、いつまでもゲームをしていて朝起きることができず出てこないという子もいると聞きました。そういった意味の不登校というのもありますので、タイプによってもいろいろあると思います。

高校に行かれている子で、能力は非常に高いのに来なくなった子がいるようで、同級生の間では夜中起きているらしいと言われているようですが、能力があっても生活習慣から不登校になってしまう子もいます。

このようにいろいろパターンがあるので、1つのやり方ではなくパターンに合わせたアプローチが必要だと思います。

委員 こうやってなんとか学校を卒業させてもらうけれど、しかし、その後一体どういう生活をしているのか関心があります。

市長 それが立ち直っているのであればいいんだけどね。

委員 そうですね。それならそういう時期もあったかということでしょうが、ずっと続いていて、単身で結婚もせず、あるいは家に引きこもっていたり、ニートみたいな形になっていたりするのであればどうかなと思います。

市長 ニートならまだよいけれど、20代、30代で引きこもってしまっているのは問題ですね。

委員 将来みんなでそういう人たちを支えて行かなくてはならないですね。きちんと将来働いて社会にまたお返ししていける子に育てていかなければならないですね。

市長 不登校は、原因がわからない子が多いみたいですね。不登校になった理由は、いじめが原因というのもあるのでしょうかけれども。

教育長 学力不振は確実に出てきますね。例えば、教室で失敗して笑われた子は、やってみないかと勧めても全く手をつけません。プライドだけはあって、「これは5年生の問題でしょ。」と言うのですが、実際にはできないんですけどね。

校長をしていた時の話ですが、ある相談員さんから「この子は繰り返しができないですよ。買い物に行った時は、必ず千円札を出す。」とのことでした。どうしようかと思い小学校のドリルをやってみないかと勧めてみましたが、そ

これは小学生の問題だと言って全く手をつけませんでした。これは、どうしたものかと苦しんだことがあります。

自分が開き直って「やるぞ」と言えれば大丈夫なのですが。ですから、ドリルの何年生というのは書かないでペーパーだけにして「できるじゃないか」と言ってやらせました。

委員 子どもをおだてないといけないから大変ですね。それにしても子どもも先生も忙し過ぎて、こんな状況で学習についていけなかったら階段をついていけなくなって、中学校になったらポーとしてしまうということになりかねないんじゃないでしょうか。今の子が習う漢字をみてもすごいです。自分たちの時代はのほほんとできていました。

市長 昔は、優秀な人もいたけれど幅が許されていたんでしょうね。

委員 とりあえず家の農家を継いでコツコツやっていたら食べていけないけれど、今はコツコツやっても食べていくことができないですからね。

市長 自分たちの時代は、50人学級だったけれど、50人もいればいろいろな人がいた。今は少人数になったので、子どもはあまり広げられなくなったのかもしれないですね。

委員 人数が少ないことが、みんなの目や手が入るのでどうかするとしてもらって当たり前になって、自分からやりに行こうということではなくて来てもらうのを待っているという傾向が出やすいという話を聞いたことがあります。

教育長 待つ姿勢ということでおもしろい話を思い出しました。先日、教育委員さんが関金小に行かれた時の話です。紹介してあげてください。

委員 山守小と関金小がいっしょになって、図書カードも本もいっぱいになってみんな図書室にいっぱいいるとのことでした。そんな中で山守小の子たちは、今まで受付で待たることがなかったらしく待たなきゃいけないということに驚いていました。

そういう意味でも、授業中でもわからないところがあれば顔の表情だけで先生がさっと対応していたのが、待たなくてははいけないとのこと。先生からしてみると待たせていると感じているようですが。

教育長 逆に、意思表示をしないと先生は来てくれないということですよ。

委員 大きい学校に子どもを通わせている親御さんは、人数が多いと自分から先生に言わないと聞いてもらえないから積極的な子になるんだよと言われた方がいますが、あながち嘘ではないと思います。

先生方の話の中にも、今、困っているのはわかっているけれど人数が多いからすぐには行ってやれない。その間、子どもたちは待ってられるのだろうか心配になると言われる話がありました。

市長 よく言われる少人数学級のメリットとして、行き届いた指導ができるということがあられるけれど、それは一面、余計なことを手出ししてしまっているかもしれないですね。

委員 子どもたちの生きる力という意味では、自分の足で前に進む力ならよいのですが、手取り足取りしてもらうのは生きる力となるのかなと思います。

委員 山守小の子どもさんは、仮に6～7人のクラスだとすると、誰が一番早くてということがわかっています。しかし、関金小へ行ったら勝てない。そこで悔しいと言って頑張るということをこの間言われていました。保育園から同じメンバーで全てがわかっているから頑張ろうという気も湧いてこないんでしょうね。しかし、たくさん的人数がいる中で、自分が1番になるはずだったのが、自分より早い子がいっぱいいるという状況の中で、一生懸命頑張ろうという良いところもあります。本当の切磋琢磨なのでしょうね。

こうして話をしているとデメリット、メリットがよくわかります。

市長 雑談のような話になってしまいましたが、大綱についてこういう形で定めさせていただいて、各論では具体的にこの教育制度に基づいてしっかりとチェックをしていただきたいと思います。

統廃合の問題も大事な核となるテーマですので、これは粘り強くやっていくしかないですね。強引にやってしまったら禍根を残すことにもなりかねませんので、誠意をつくしてやっていきたいと思いますので引き続きご尽力をお願いします。

各委員 (承認)

教育長 成徳小学校区での適正配置推進計画説明会では、計画どおりやるべきだと言われる方も結構おられました。一方で、なぜ明倫ありきかと、ただ広いだけかと言われる方もあります。

市長 それは、みなさんの合意の中でいいと思います。

委員 小鴨小の前に田んぼがあり、あそこが学校用地になれば先生方の車を駐車したりすればと思いますが。

市長 田んぼというより民家を買ってという話ですよ。

委員 それと社小の校庭はそんなに広くないですね。川があって、あの川を何か工夫してあの部分が一体になれば広くなるんでしょうけど。

委員 あの川はザリガニがいてとりに行くんですよ。それより、もう少し下に今荒れた所があります。もちろん、用水路も埋めれば更に広がります。

市長 それも含めてですね。

委員 よろしくお願いします。

5 閉会 午前11時25分 終了